

「武庫川国文」第九十号 抜刷
令和三年三月二十日 発行

動物変身譚と『太平広記』の部立てに関する一考察

小山

瞳

動物変身譚と『太平広記』

の部立てに関する一考察

小山 瞳

はじめに

中国・北宋末、十世紀に編纂された説話集の『太平広記』には九二の分類項目が設けられ、「龍・蛟」「虎」「畜獸」「狐」「蛇」「禽鳥」「水族」「昆虫」には、動物が人間に変身したり、人間が動物に変身したりする説話――動物変身譚（以下、変身譚とする）が複数収録されている。

これら動物にまつわる主題のうち、「水族」（『太平広記』巻四六四から巻四七二が相当する）には水生動物にまつわる説話が収録されている。そして、「水族」の大分類のもとに、「水怪」「水族為人」「人化水族」「亀」の小分類がさらに設けられている（次表参照）。

『太平広記』巻数	『水族』分類順	小分類
四六四	一	（なし）
四六五	二	（なし）
四六六	三	（なし）
四六七	四	水怪
四六八	五	水族為人
四六九	六	水族為人
四七〇	七	水族為人
四七一	八	水族為人 人化水族
四七二	九	亀

「水族為人」は『太平広記』巻四六八から巻四七一の前半部分に相当し、ここに水族が人間に変身する説話が収録されている。また、「人化水族」は『太平広記』巻四七一後半部分に相当し、人間が水族に変身する説話が収録されている。ところが、小分類が設けられていない巻四六四から巻四六六（以下、便宜的に「水族（小分類なし）」とする。）にも変身譚は存在し、巻四六七の「水怪」にも変身譚は存在する。さらに、「水族為人」や「人化水族」のように、変身譚をほかの説話と区別するのは「水族」だけであり、数多くの動物変身譚が収録されている「虎」や「狐」にもない。

このように、「太平広記」の分類は一貫した規則があるようには見えないのだが、『太平広記』の分類について、張国風『太平広記』版本考述（中華書局、二〇〇四年）は一〇三頁で次のように述べている（文章記号を一部改め、字体も日本現行字体に改めた）。

人們可以指責『太平広記』的分类不那么符合邏輯，人們可以責備『太平広記』的選材不那麼恰當；但是，人們不能不承認『太平広記』入選的篇目無不具有某種故事性、趣味性。

人々は『太平広記』の分類があまり論理に合致していないのを責め、『太平広記』の題材選びがあまり適切でないと非難するが、『太平広記』で選ばれた編目について、ある種の物語性やおも

しろみが備わっていることを認めざるを得ない。

この指摘を参考にするならば、『太平広記』の分類は、必ずしも整合性のとれたルールに従って構築されたのではなく、収録されている各説話を物語性やおもしろみ——物語としてどのように享受するか——の視点から考案されたといえるのではないだろうか。そうだとすれば、『太平広記』編纂当時、「水族為人」「人化水族」の小分類に収録されている変身譚については、そのほかの編目——「水族（小分類なし）」や「水怪」などの分類項目——の変身譚とは異なり、説話がもつ物語性・おもしろみ（伝奇性）に重点が置かれ、それに基づいて分類項目が立てられたのであり、必ずしも百科事典のように、科学的な整合性をもって分類されたのではないと考えられる。そして、項目ごとにそれぞれ性質が異なる説話として教授すべきだといった意識があったのではないか、とも考えられる。

そこで、本稿では、「水族」に収録されている変身譚について、「水族」の小分類項目ごとに考察を行い、『太平広記』において変身譚がどのように享受されたのかをうかがうこととしたい。

なお、本稿では原文を訳出する際に、基本的に日本語訳をしたが、一、二文ほどの短い文章については訓読を施した。

一、「水族為人」「人化水族」所収変身譚の様相

水生動物が人間に変身する説話のほとんどが「水族為人」に収録される。すべてをあげることはできないので、ここでは代表的な二例を挙げるにとどめる。最初に挙げるのは巻四六八「張福」（出「捜神記」）である。²

鄱陽人張福、舡行還、野水辺忽見一女子、甚有容色、自乘小舟。福曰「汝何姓。作此舡行、無笠雨駛、可入見就避雨。」因共相調、遂入就福寝。以所乘小舟、繫福舡辺。三更許、雨晴明月、福視婦人、乃一大鼈、欲執之、遽走入水。向小舟、乃是一棹段、長丈余。

鄱陽（現江西省鄱陽県）の人である張福は、船で帰る途中、川辺で一人の女子に出くわした。たいへん容色にすぐれていて、船に乗っていた。福が言った、「姓はなんといのですか。そんなに軽装で、笠ももたずに雨のなかを行き来するなんて、なかに入って雨をお避けなさい。」そうして、一緒にふざけて中に入って福と寝た。乗っていた小舟は福の船のとなりになっていた。三更のころ、雨が止み、月が出た。福が女を見ると、大きな鼈（た）だったので、捕まえようとすると、すぐに逃げて水のなかに入った。女が乗っていた小舟のほうを見てみると、なんと不揃い（ふぞろい）の木でできた筏であり、一丈あまりの長さしかなかった。

最初は女子の姿をして現れたものの、最後に正体が巨大な鼈であったことが露呈する³。人間に変身した動物が人間と過ごしたあとに、本当の姿をさらしてしまうという展開は、異類婚姻譚の典型的なパターンでもある。このような水族にまつわる異類婚姻譚は、すべて「水族為人」に収録されている。異類婚姻譚は変身譚の派生したものだと認識されていたのだろう。次に異類婚姻譚とは関係のない変身譚を挙げる。まずは、巻四七〇「謝二」（出「広異記」）である。

唐開元時、東京士人以遷歴不給、南遊江淮、求丐知己、困而無獲、徘徊揚州久之。同亭有謝二者、矜其失意、恒欲恤之、謂士人曰「無爾悲為、若欲北歸、当有三百千相奉。」及別、以書付之曰「我宅在魏王池東。至池、叩大柳樹。家人若出、宜付其書、便取錢也。」士人如言。逕叩大樹。久之、小婢出、問其故、云「謝二令送書。」忽見朱門白壁、婢往却出、引入。見姥充壯、当堂坐、謂士人曰「兒子書勞君送、令付錢三百千、今不違其意。」及人出、已見三百千在岸。悉是官家排斗錢、而色小壞。士人疑其精怪、不知何處得之、疑用恐非物理、因以告官、具言始末。河南尹奏其事、皆云「魏王池中有一鼃窟、恐是耳。」有勅、使擊射之、得崑崙數十人、悉持刀鎗、沉入其窟、得鼃大小數十頭、未得一鼃。大如連牀。官皆殺之、得錢帛數千事。其後五年、士人選得江南一尉、之任、至揚州市中東店前、忽見謝二、怒曰「於君不薄、何乃相負、以至於斯。老母家人、皆遭非命、君之故也。」言訖辞去。士人大懼、十余日不之官、徒侶所促、乃發。行百余里、遇風、一家尽沒。時人云「以為謝二所損也。」

唐の開元（七一三〜七四一年）の時、東京（現洛陽）の士人が、官途に恵まれず生活も立ちゆかなくなり、江淮（長江と淮河一帯）をさまよい、知り合いに援助を求めたものの、得られず、長く揚州にとどまっていた。士人が泊まっていた宿に謝二という者がいて、士人が失意の底にいることに同情し、いつも世話をしてくれた。謝二が士人に言った、「そんなに悲しむことはありません。もし北に帰りたいのなら、錢三百千を差し上げましょう。」別れに際して、錢とともに手紙も渡され、手紙には次のようにあった。「私の家は魏王池（洛陽にあった

唐代の名勝地）の東にあります。池に着いたら、大きな柳の木を叩いてください。家の者が出てきたら、この手紙を渡して、金を受け取ってください。」士人は謝二の言いつけ通りに、手紙を携えて、言われた通りの場所に行き、大きな柳の木を叩いた。しばらくして、幼い女召使いが出てきて、来訪の理由を尋ねた。士人が、謝二から手紙を届けるようにいわれたと述べると、突然、目の前に赤い扉と白い壁が見えて、女召使が中に入り、出てきたかと思ったら、士人を連れて中に入った。そこには、元氣あふれた老婦人がいて、堂内に端座していて、士人に話しかけた、「息子からの手紙があなたのおかげで届きました。錢三百千をお渡しするようにとありますので、その通りにいたします。」士人は外に出て、三百千を池のほとりに置いた。すべて官が発行する排斗錢（未詳）だったが、色が暗かった。士人は彼らが化け物ではないかと疑った。また、どこでこの錢を得たのかと思い、錢を使うことによって物事の理に反してしまふことを恐れて、事の次第をお上に告げた。河南の尹がこのことを奏上し、その場にいた者全員が「魏王池に鼃のすみかがあり、おそらく、そいつらだ。」と言った。勅が下り、人をやって鼃を殺させることになった。崑崙（潜水にすぐれた胡人）数十人全員が刀や鎗をもって、洞窟に入ると、大小さまざまな鼃数十頭を捕まえ、最後に二頭の鼃を捕まえた。その鼃は寝台二台分ほどの大きさだった。役人たちはすべて殺して、錢や布などを得て大いに儲けた。それから五年後、士人は江南のある県の県尉となり、任に赴く途中で、揚州の市場の東のほうにある店の前で、謝二を見つけたが、謝二は怒って言っ

た、「私はあなたにどれほどの施しをしてあげたことか。にもかかわらず、私を裏切るようなことをして、よくここにいられますね。母や家の者が非業の死を遂げたのはあなたのせいです。」言い終わると別れを告げて去った。士人は大いに恐れて、十日経っても赴任先に行こうとしなかったので、お付きの者が促して、ようやく向かうことになった。百里あまり行くと、嵐に遭遇し、一家全員が亡くなった。当時、人々は「謝二によって、その身を滅ばされたのだ」と言った。

はじめ、謝二という男が人間として現れ、「東京士人」は謝二の正体が^{すづばん}鼈であることに気がつかずにいたものの、謝二の実家である魏王池が勅命によつて撃たれたときに、それが^{すづばん}鼈の洞窟だったことが明らかになる⁴。当初は人間であることが明かされず、物語終盤に正体が明らかになるというのは、『太平広記』所収の動物変身譚全般に多く見られる形式である。

人間が水生動物に変身する説話については、「人化水族」に収録される。まずは巻四七一「黄氏母」（出『神鬼伝』）を挙げる。

後漢靈帝時、江夏黄氏之母浴而化為^{すづばん}鼈、入于深淵。其後時時出見。初浴簪一銀釵、及見、猶在其首。

後漢の靈帝の時、江夏の黄氏の母は入浴して^{すづばん}鼈になつて、深い池に入つた。その後も時々姿をあらわした。そのむかし、入浴した時に銀のかんざしを挿していたのだが、今でも^{すづばん}鼈の頭になつている。

このほか、「水族為人」所収の巻四七一「宋士宗母」（出『統搜神記』）および巻同「宣審母」（出『広古今五行記』）の二話も入浴中の女性が水族に変身する説話である。これら三話は『太平広記』ほか、正史の五行志にも記載があり、人間が水族に変身することについて虚構を交えて書いたというよりは、歴史的記録に重きを置いた記述だといえる⁵。

さらに、「人化水族」には、長寿の男性が水族に変身する説話もある。巻四七一「江州人」（出『広古今五行記』）である。

晋末、江州人年百余歳、頂上生角、後因入舍前江中、変為鯉魚、角尚存首。自後時時暫還、容状如平生、与子孫飲、数日輒去。晋末已来、絶不復見。

晋末、江州のある人が百歳を過ぎて、頭に角が生えた。そのあと、家の前の川に入ると、鯉に変身したが、角はまだ頭の上にあった。それからまた家に帰ると、姿かたちは以前のようであり、子や孫と酒を飲んで、数日後には去った。晋末に来て、それからは見なくなった。

また、巻四七一「独角」も、「江州人」同様、長寿の男性から角が生え、のちに鯉になつたとあることから、類似する説話として「人化水族」に分類されたと考えられる⁶。

このように、「人化水族」に分類されている変身譚を見ていくと、人間の姿をしていた水族が水族にもどつただけなのか、あるいは人間が水族に変身したのが明確ではないことがわかる。しかしながら、「水族為人」および「人化水族」所収の変身譚の差異について

詳細に述べることは不可能であるため、今後の課題とし指摘するにとどめたい。以下、「水族為人」、「人化水族」以外に収録された動物変身譚の様相について述べる。

二、「水族為人」、「人化水族」以外の動物変身譚について 二の二、「水族（小分類なし）」

『太平広記』「水族」の巻四六四から巻四六六の「水族（小分類なし）」にもいくつかの動物変身譚が収録されている⁷。はじめに挙げるのが巻四六四「横公魚」（出『神異録』）で、その次に挙げるのが巻四六五「蠺婦魚」（出『述異記』）である。

北方荒中有石湖，方千里。岸深五丈餘。恒氷。唯夏至左右五六十日解耳。有横公魚，長七八尺，形如鯉而赤，晝在水中，夜化為人。刺之不入，煮之不死，以烏梅一枚煮之則死，食之可止邪病。

北方荒に石湖があった。千里ほどで、崖は五丈あまりで、いつも水が張っている。ただ夏至の前後五、六十日だけ水がとけた。ここに横公魚がいて、七、八尺ほどで、形は鯉のようで赤かった。昼は水中にいるが、夜は人になった。刺しても刀が入らず、煮ても死なないが、烏梅を二つ入れて煮ると煮えて死ぬ。これを食べると病がよくなる。

淮南有蠺婦魚。俗云，昔楊氏家婦，為姑所怒，溺水死為魚。其脂膏可燃燈燭，以之照鼓琴瑟博奕，則爛然有光。若照紡績，則不復明。

淮南に蠺婦魚がいる。民間では、かつて楊家の嫁が、姑にいびられ、入水したときに魚になったのだという。蠺婦魚の脂肪は行燈を燃やすことができる。この明かりで鼓や琴瑟、博奕を照らすと、あざやかに光輝く。もし糸つむぎのところを照らすと、二度と明るくならない。

これらはいずれも変身の事象を含むものの、変身について述べているというよりは、その水族の生息地、調理方法、および名称の由来などについて説く博物学的記載だといえよう。

博物学については『世界大百科事典（第二版・電子版）』（日立デジタル平凡社、一九九八年）の浦本昌紀執筆「博物学・（日本の博物学）」の項に次のようにある（一部文章記号を改めた）。

もともと日本語の博物学は、西欧語の訳語としてではなく、中国の『博物志』に想を得た「博物」、すなわち広く物を知ることというこばに由来し、明治期に natural history の訳語としてあてられたものである。

また、佐々木聡「異と常——漢魏六朝における祥瑞災異と博物学」（東アジア怪異学会『博物学の地平』、二〇一八年）五四～五五頁には、次のようにある（一部文章記号を改めた）。

博物書を起点として、「異」と「常」との対比を見ていくと、「異」と「常」とが、中華思想を背景とする下界と内地（中国）の観点から語られていることに気づく。常なる中国にはない、下界

の稀有な産物こそが「異」であり、その実在を疑う者に對し、その実在性の証左として諸書に見える様々な「異」が挙げられる。

つまり、博物書の役割は「異」なるものの存在を知らしめ、それが「中国」内外に実在することを確認づけることにあるといえる。また、そうした博物学的記載は、物語性——物語として見聞きして楽しいか——ということよりも、資料性——「異」なるモノや事がらがたしかに存在したことを示す証拠資料としての性質——のほうに重点が置かれているといえる。

ところが、「水族（小分類なし）」には鯀と禹の治水にまつわる巻四六六「夏鯀」（出『王子年拾遺記』）も収録されており、こちらは上に挙げた巻四六四「横公魚」や巻四六五「嬾婦魚」よりも文字数が長く、物語性に富んでいる。

堯命夏鯀治水、九載無績。鯀自沈於羽淵、化為玄魚。時植馨振鱗、横遊波上。見者謂為河精、羽淵与河海通源也。上古之人於羽山之下脩立鯀廟、四時以致祭祀。常見此黑魚与蛟龍濺灑而出、觀者驚而畏之。至舜命禹、疏川奠岳、行遍日月之下、唯不踐羽山之地。涖巨海則龍龜為梁、踰峻山則神龍為負、皆聖德之感也。鯀之化、其事互說、神變猶一、而色狀不同。玄魚黃熊、四音相乱、伝写流誤、並略記焉。

堯は夏の鯀に治水を命じたが、九年のあいだ成果をあげられなかった。鯀は羽淵に入水して、玄魚となった。その時、尾ひれを振りながら波のはざまで泳いでいた。その姿を見た者は黄河の精とみなし、この羽淵こそ黄河や海の共通の源だと考えた。

上古の人は羽山の下に鯀廟をたてて、四季に応じて祭祀を行った。この黒い魚と蛟や龍がばしやばしと水しぶきをあげながらおどり出るのが目撃され、見る者は驚いた。舜が禹に（治水を）命じるにあたり、天地をくまなくめぐったけども、唯一、羽山の地には足を踏み入れていなかった。巨大な海を渡ると龍龜（スッポンやカメ）が梁となり、踰峻山は神龍が背負ったのであり、それはすべて聖徳に感応したものだ。鯀が化けたことについて諸説あり、神が変じたという点では一致しているが、色や形状が合わない。玄魚や黄熊、諸説入り交じるのは、伝写の過程で誤りが生じたものであり、ここにその大略を記しておく。

鯀の伝説については、「水怪」にも巻四六七「鯀」（出『述異記』）として収録されている。巻四六六「夏鯀」が最後のほうで、鯀が水族に変身した由来について異伝が存在していることを説明しているのに対し、巻四六七「鯀」は鯀が「黄能（黄クマ）」になったことだけをいう。ここではどちらの伝承が正しいのかについては本題からはずれるため論じないが、ここに挙げた巻四六六「夏鯀」のほう、羽淵と河海の源について語り、踰峻山を神龍が背負った理由について述べるなど、具体的に記述されている。このことから、巻四六七「鯀」よりも巻四六六「夏鯀」のほう、広くものを知ることとを目的とする博物学的要素が強いといえるだろう。

二の二、「水怪」に収録されている動物変身譚について巻四六七「水怪」にも動物変身譚が複数収録されている（次節の表を参照）。次に挙げるのは、神の使いの水族を食べたことで、食

べた召使いだけでなく主人一家が殺されることになった巻四六七「葉朗之」（出『広古今五行記』）である。

唐建中元年、南康県人葉朗之使奴当帰守田。田下流有鳥陂、陂中忽有物喚。其声似鵝而大、奴因入水探視、得一大物。身滑宛軫、内頭陂下。奴乃操刀下水、截得其後闊六尺余。長二丈許、牽置岸上、剥皮剖之。比舍數十人咸共食炙、肉脆肥美。衆味莫逮。背上有白筋大如脰、似鰻魚鼻、食之特美。余以為脯。此物初死之夕、朗之夢一人、長大黑色、曰「我章川使者。向醉孤遊、誤墮陂中、為君奴所害。既廢王命、身罹戮辱。又析肌剖臙、焚燠充膳。冤結之痛、古今莫二。与君素無隙恨、若能殺奴、謝責償過、罪止凶身。不爾法科、恐貴門罹禍。」朗之驚覺、不忍殺奴。奴明年、為竹尖刺入腹而死。其年夏末、朗之孿家得病、死者八人。唐の建中元年、南康県（現江西省贛州市）の人である葉朗之は召使いを田畑の見張りにやった。田畑の下流に鳥陂（未詳）とよばれる池があり、池からわめく声が聞こえてきた。その声は鵞鳥のように大きく、召使いは水に入って大きなものを探し当てた。その身はなめらかで、体をばたつかせて、頭は池のなかに浸かっていた。召使いは刀を手にしてまた水に飛び、尾六尺あまりを斬った。長さは二丈ばかりあり、岸まで引きずっていき、皮を剥いでその体を分けた。隣近所の者数十人とともに焼いて食べたが、肉はやわらかくうまかった。味はほかのものとは比べ物にならないほどであった。背に白い筋が通った、まるで鰻魚（ヘラチヨウザメ）の鼻のようで、格別にうまかった。残りには干し肉にした。これが命を落としたその日の晩、朗之は夢

を見た。夢のなかで、長身で黒い人物が言った、「私は章川（江西省一帯を流れる贛江の一支流である章江）の使者である。いくばくか前に酔って出かけたところ、誤って池のなかに落ちてしまったところを、貴殿の召使いに殺された。天帝の命を実行することができなかつたために辱めを受けることになってしまった。そのうえ、皮膚を剥がれ内臓をえぐられ、あぶられて料理にされてしまった。この痛みは怨念となること、今までにないほどである。貴殿には何の恨みもないので、もしも私を痛めつけた召使いを殺してくれるのなら、感謝してその損失を償うことにし、罪は召使いにだけ及ぶことになる。そうでなければ、掟によって貴殿一家にも災いが及ぶことになる。」朗之は驚いて目が覚めたが、召使いを殺すに忍びなく、そのままにしていた。召使いは翌年、竹やりが腹に刺さって死んだ。同じ年の夏のおわりに、朗之一家も病を得て、亡くなった者が八人であった。

最初、水族は水族——具体的には鰻魚——として姿を現し、召使いに食べられてしまう¹⁰。その日の夜に、水族は主人の夢のなかに出現し、召使いの罪を訴える。この時、水族は人間の姿をしており、夢のなかとはいえ、水族が人間として現れるという点では、動物から人間への変身譚だといえる。

これと同様の説話である巻四六七「柳宗元」（出『宣室記』）、巻四六七「王瑤」（出『耳目記』）、「李延福」（出『傲誠録』）も「水怪」に掲載されている。このうち、「王瑤」（出『耳目記』）では、最後に巻四六七「柳宗元」のことに触れられていることから、この二話

は関連する説話として受容されたと考えられる¹¹。これらの説話について、話型構成要素¹²とに分割すると次のようになる。

- ①ある人が夢の中で、知らない人物から助けてほしいと懇願される（あるいは、すでに食べられてしまった水族が、自分を食べた人物を罰してほしいと懇願する）。
- ②ある人が夢から覚めると、夢に見た水族が捕まえられているのを見かけて、放流する。
- ③水族が夢に現れて感謝する（あるいは夢を見た人物が水族を放つことができず、首から上がない状態の人が夢に現れる、または水族を罰しなかった人も死ぬことになる）。

各話それぞれ異同はあるが、いずれも現実世界では水族の姿をし、夢の中では人間の姿をしているという共通点がある。ここでは、水族が夢の中で人間に変身して現れる説話を「水族夢変身型」とよぶことにする。

ところで、こうした「水族夢変身型」説話は、どうして「水族為人」や「人化水族」ではなく、「水怪」に収録されたのか。その理由を考えるにあたってヒントになるのが、巻四六七の小分類に付されている¹³「水怪」の意味である。次は、¹⁴「水怪」が何をさすのかについて考えたい。

二の三、¹⁵「水怪」の意味

¹⁶「水怪」の語そのものが意味するものを探る前に、まずは『太平広記』「水怪」にどのような説話が収録されているのかについて概

観したい。次に挙げるのは「水怪」所収の説話における「変身の有無」と水怪として論じられている対象物について分析したものである。

	題名	変身の有無	¹⁷ 「水怪」として論じられている対象物
1	「鯨」（出「述異記」）	○	「鯨」（「黄能」に変身する）
2	「桓冲」（出「法苑珠林」）		水を飲む者をおどす「赤鱗魚」
3	「李湯」（出「戎菴閑談」）		水中に住む「猿猴」のようなもの
4	「齊諧」（出「広異記」）		「鰐龍」、「鯉魚五六枚」、「靈龜兩頭」
5	「子英春」（出「神鬼伝」）		もの言う「青鯉」
6	「洛水豎子」（出「朝野僉載」）		人を溺死させる「白練帯（白いぬぎぬの帯）」
7	「魍魎」（出「録異記」）		「魍魎」（未詳）に化けて人を苦しめる 「鯉魚（コウライギギ）」
8	「羅州赤龍」（出「朝野僉載」）		水生をも水に引きこみ、その血をすう 「赤龍」
9	「韓珣」（出「広古今五行記」）		土の中にいた「魚数千頭」
10	「封令禪」（出「広古今五行記」）		木の中にいた「鯽魚」
11	「凝真觀」（出「広古今五行記」）		柱の中にいた「鰐螭」
12	「蜀江民」（出「録異記」）		火で炙られて死なない「巨龜（巨大すっぽん）」
13	「張胡子」（出「靈怪集」）		腹に矢が書かれた「巨魚」
14	「柏君」（出「録異記」）		字が書かれた「魚」
15	「葉朗之」（出「広古今五行記」）	○	「魚」（正体は「章川使者」）
16	「柳宗元」（出「宣室志」）	○	「婦人」（正体は「黃鱗魚」）
17	「王璠」（出「耳目記」）	○	「魚」（正体は「馮夷之宗（水の神の一族）」）
18	「柳沂」（出「宣室志」）		人を噛む「巨魚」
19	「崔悅」（出「玉堂閑話」）	○	「十九人皆衣青練」（正体は十九の「龍」）
20	「染人」（出「稽神錄」）	○	「白衣少年」（正体は「白龍（白いすっぽん）」）
21	「海上人」（出「稽神錄」）		水中を漂う、顔のついた人間の腕
22	「法聚寺僧」（出「蜀記」）	○	帽子をかぶった「数万人」（正体は「蠶子」）
23	「李延福」（出「微誠錄」）	○	「烏鰂三十人」（正体は「龜三十頭」）

【注】(1) 説話中に変身が確認されるものに○を入れた。(2) 「水怪」として論じられているもの」の項目で括弧書きにしたのは原文から抜き出したものである。(3) 張国風『太平広記会校』には、談本と沈本の異同の箇所も載っているが、ここでは談本を基調とした汪紹楹『太平広記』に拠った。(4) 通し番号7の「魍魎」については、本文に「能く魍魎と為り幻惑妖怪、亦た能く人を魅す。」とあるが、人間の形をしているかが不明なため、ここでは怪物の一種と判断し、水族の変身譚としては扱わなかった。(5) 日本語で見慣れない動物の漢字名については、前掲加納書を参照したが、同書にならないものについては郭郭・李約瑟(ジョセフ・ニーダム)・成慶泰『中国古代動物学史』(科学出版社、一九九九年)も参照した。

表を一覧するとわかるように、「水怪」には変身の要素のない説話のほが多い。これら変身の要素のない「水怪」説話における「水怪」として論じられている対象は、通常とは異なる水族(通し番号2、3、4、5、12、13、14)、いるはずのない場所にいる水族(通し番号9、11)、人に害を及ぼす水族(通し番号7、8、18)、水族ではないけども水辺に関係する正体不明の物体(通し番号6、21)など、いずれもそれが結局、何であるのかがよくわからずに話が終わる。一方、変身が確認された八話は、いずれも変身前と変身後の正体が明らかであり、「鯀」(通し番号1)が禹の治水伝説にちなむものであるほかは、「水族夢変身型」説話である。

このことから、『太平広記』でいう「水怪」とは、水族でなくともかまわないが、水辺に関連するものでなければいけないうえ、必ずしも人間に祟りをなす妖怪や化物の類ではないことがわかる。そして、『太平広記』編纂者たちが、「水怪」をたんに妖怪や化

物の類としてしか考えていないのであれば、魚が仏典を唱える巻四七〇「劉成」や亀がものを言う巻四六八「永康人」も「水怪」に収録されなければいけないはずなのに、これらの説話は「水族為人」に収録されている。

ここで、一度『太平広記』「水怪」から離れ、水怪という語が『太平広記』編纂時までに、どのような意味で使われてきたのかということについて考察し、中国古典文学において「水怪」の語がどのような意味で用いられてきたのかについて考えてみたい。管見のかぎり、「水怪」の語の初出は『西京雜記』巻四にさかのぼることができる¹²(波線は引用者による。以下同じ)。

哀帝爲董賢起大第於北闕下。(中略)柱壁皆画雲氣、蓊藹、山靈、水怪、或衣以綈錦、或飾以金玉(後略)

哀帝は董賢のために北闕付近に邸宅を建ててやった。(中略)柱や壁はすべて雲氣、蓊藹、山靈、水怪が描かれ、また衣は綈や錦を着て、また金や玉で飾り(後略)

董賢は断袖の故事で知られる人物で、哀帝から寵愛された人物である。ここでは、董賢が哀帝から賜った邸宅を描写する箇所で、「水怪」という語が用いられている。この一文およびこれ以降の文にも、「水怪」がどのような形をしているのかについては触れられていないので、推測するしかないが、「山靈」という語と並列することから水辺に住む超自然的存在をさすと考えられる¹³。

このことは、時代が下った南朝齊・梁の劉勰『文心雕龍』をみると同様のことがいえる。『文心雕龍』誇飾にある揚雄の「羽

獵の賦」と張衡『羽獵賦』について論じた一文を挙げる（この日本語訳は、一海知義・興膳宏訳『世界古典文学全集 第二五卷 陶淵明 文心雕龍』（筑摩書房、一九六八年）三九〇頁から引用した）。¹⁴

又子雲校獵鞭宓妃以饌屈原，張衡羽獵困玄冥於朔野，變彼洛神既非魍魎，惟此水怪，亦非魍魎，而虛用濫形，不其疎乎。

また揚雄の『羽獵の賦』では、宓妃を強要して屈原をもてなさせたり、張衡の『羽獵賦』では、水神を北方の荒野に幽閉したりするが、あのあでやかな洛水の女神宓妃は、魍魎ちやうりやうの類でなく、一方の水神も、妖怪変化ようかいへんげとは類を異にする以上、心やすだてに乱用するのは、全く無神経というべきである。

以上の二例から、水怪みづかいが水の神の意味で使われていると推測することができる。また、次に挙げる『太平広記』成書から五十年ほどのちの欧陽脩『新五代史』巻四一「雷満伝」にも、水怪みづかいが登場する。¹⁵

雷満、武陵人也。満嘗鑿深池於府中。客有過者，召宴池上，指其水曰「蛟龍水怪皆窟於此，蓋水府也。」酒酣，取坐上器擲池中。因裸而入，取器嬉水上，久之乃出，治衣復坐，意氣自若。

雷満は武陵の人である。満はかつて府中で池を掘削したことがあった。訪問客がいると、池で宴席をひらき、水を指さして言った、「蛟龍や水怪はみなここに潜んでいる、おそらく水府（伝説上の水神または龍王のすみ所）なのだろう。」（雷満は）酒た

けなわになると、敷ものの上にあった器を池の中に放り投げて、裸で池にはいって、器をとって水で遊び、しばらくしてから自ら出て、衣服をただしてまた座った。

この記事においては、水怪みづかいが蛟龍とともに用いられていて、それらは「水府」に生息しているとある¹⁶。このことから、ここである水怪みづかいも水生の超自然的存在をさすと考えられる。ただ、『文心雕龍』誇飾でいう水神としての水怪みづかいをさすというよりは、『西京雜記』巻四における貴人の邸宅の柱を描写した「山靈」に対する水怪みづかいのほうが近いのであろう。

こうした用例から、水怪みづかいの語は、魚や亀などの実在する水生動物をさすというよりも、龍や蛟ほか、靈的能力をもった水生の異類のほか、『文心雕龍』誇飾に登場した玄冥や洛神などの水神をもさすと考えられる。

『太平広記』「水怪」所収の説話に話をもどす。「水怪」所収の「水族夢変身型」説話七例のうち、巻四六七「葉朗之」は「章川使者」を名乗り、巻四六七「王瑤」も「馮夷之宗」と名乗っていることから、水神に遣わされた存在だということがわかる。また、「水族夢変身型」説話ではないが、巻四六七「鯨」も祀られていることから神と見なすことができる。つまり、「水怪」所収の変身譚については、水神やその使いであることから、単なる水族の変身譚とは区別されたと考えられる。また、「水族夢変身型」説話のそのほかの説話も、ある人の夢に人間として姿を現すという構造から、巻四六七「葉朗之」らと同様の類似するパターンの説話として「水怪」に収録されたのではないだろうか。一方、同じく「水怪」に収録された説話で

あつても変身譚でない説話においては、『水怪』は、変身譚という水神の意味ではなく、水辺に関連する正体不明の物体をさしている。つまり、『水怪』の語は、上は水神から下は水辺に生息する正体不明の物体まで、人知では計り知れない水辺の超自然的物体を幅広くさすと考えられる。『水怪』の語自体は特定のモノや神をさすわけではなかったのである。

おわりに

『太平広記』「水族」所収の動物変身譚は「水族為人」と「人化水族」を中心に収録されているものの、それ以外の「水族（小分類なし）」と「水怪」にも収録されていることを見た。

「水族（小分類なし）」に収録される説話は、水族の特徴や生息地などを述べる博物学的記録が中心である。それらは、「水族為人」や「人化水族」同様、変身という事象について言及していながらも、人間が水族に変身したことや人間が水族に変身したこと自体は論点ではない。むしろ、その事物について見識を挙げ、広めることが目的である。そのため、「水族（小分類なし）」所収の変身譚には物語性が必要とされなかった。

「水怪」所収の変身譚については、『水怪』の意味するものについて考えるために、小分類の項目名となっている『水怪』の用法についても述べた。『水怪』の語は、水神ほか、水辺の正体不明の物体など、幅広いものをさし、「水怪」にはそれらに関する説話が収録されている。「水怪」説話のうち、変身譚の要素のない説話は、『水怪』の正体が不明のまま話が終わるが、変身譚の要素を含む説話では、『水怪』の正体が明らかになって話が終わる。これら「水怪」所収の変

身譚は、変身譚という話型構造を保持するものの、『水怪』の正体が何であるかを述べることにのほかに重きが置かれ、水族の変身行為自体は説話の眼目ではなかったのだらう。

「水族為人」および「人化水族」所収の変身譚については、博物誌的要素よりは、「小説」としてのおもしろみなどの要素のほうが強い。つまり、創作性・虚構性を持つ「小説」、後世の文学史的視点から見て「唐代伝奇小説」と言われる作品群がここにも誕生していることが見て取れる。

なお、『太平広記』「雑伝記」について、成瀬哲生「『太平広記』古小説の文化構造」(月刊『しにか』三月号、大修館書店、一九九八年所収) 四一頁は次のように指摘する。

(前略)「雑伝記」の「雑」は、『太平広記』の編集者たちが分類しただけではなく、新しさを認識していた故の命名かと思われる。

とすれば、『太平広記』には、「小説史」という概念が萌芽しており、時間の所産である唐代小説の新しい史的展開は、空間的なコスモロジーの分類に収まり切れなかったのである。中国に於ける「小説史」の自覚は、『太平広記』に始まるといえるのかもしれない。

ここでは、「雑伝記」(『太平広記』巻四八四から巻四九二にかけて)について述べているが、「水族」についても同じことがいえよう。

「水族」の分類については、表面的にはちぐはぐな印象を受けざるを得ないが、「水族為人」および「人化水族」という項目を創設

したところに『太平広記』を編纂した人々のある意図がうかがえる。つまり、変身自体の物語性やおもしろみが強い説話については、「水族」の下に新たに「水族為人」および「人化水族」を作り、そちらに収録したのではないかと推測できるのである。それは、まさしく、成瀬論考でいう「時代の所産である唐代小説の新しい史的展開」に相当するであろう。この推測を傍証するものとして、「人化水族」の「薛偉」がある。これは前述の通り、明代白話小説、さらに秋成の説本にまで翻案された作品であり、太宰治の「魚服記」の「魚服」という言葉は、「薛偉」がなければ生まれなかったものである。この作品は、後世の作家たちの文学的想像力を大いに刺激する作品だったのである。

注

- 1 『太平広記』の分類項目については、中国では「○○類」のように表記し（張国風『太平広記』、版本考述（中華書局、二〇〇四年）ほか）、日本では「○○部」のように表記する先行研究もあるが（三田明弘『太平広記』狐部説話の構成（『東洋研究』第一九九号、大東文化大学東洋研究所、二〇一六年）など）、ここではしたがわず、単に「○○」と表記する。
- 2 以下、『太平広記』原文はおもに汪紹楹校勘『太平広記』（中華書局、一九六一年）に拠った。ただ、類話の存在とそのありかを調べるのは、張国風会校『太平広記会校』（北京燕山出版社、二〇一二年）のほうが使いやすいため、類話を調べるにあたっては後者を利用した。ただ、前者と後者には文字の異同がいくつかあるものの、どちらが正しいかを決定づける要素が見あたらないので、ここでは、長年用いられてきた汪紹楹版『太平

広記』に拠った。

- 3 加納喜光『動物の漢字語源辞典』（東京堂出版、二〇〇七年）三四一頁「羅」の項は、羅を扁平なワニ（ヨウスコウワニ）とする。なお、以下、日本語でなじみのない動物名を日本語に訳す際は、ルビを振って対応することにし、同書に掲載のない動物については、適宜、注を入れる。

- 4 鼈については、前掲加納書三三九頁「鼈」の項参照。

- 5 巻四七一「人化水族」の最後に収められる「薛偉」（出『續玄怪録』）は長篇である。蜀州青城県主簿の薛偉が、病気になって意識が遠のいて魚に変身したのち、紆余曲折を経て人間にもどるというストーリーである。この話をもとに、明代、馮夢龍によって白話小説「薛録事魚服証仙」（『醒世恒言』巻二十六）が書かれ、さらにこの馮夢龍の翻案小説が江戸期の日本で上田秋成の「夢応の鯉魚」へと翻案される。「水族」の変身譚としては白眉といえる説話であり、「人化水族」には全部で六話しか収録されないことから考えて、『太平広記』の編者は、この「薛偉」を同書に収録するためにこそ「人化水族」という項目を創設したのではないかとすら感じられる。

- 6 富永一登『中国古小説の展開』（研文出版、二〇一三年）第五章「唐代伝奇論考」四四一頁は、巻四七一「江州人」について、上述の巻四七一「黃氏母」と類似するとし、加納喜光『漢字の博物誌』（大衆館書店、一九九二年）（未確認）の指摘を挙げた上で、神仙家による鯉の神秘化と関係するのではないかと推測する。たしかに、「人化水族」所収の変身譚については巻四七一「薛偉」を除外すれば、長寿の人物が水族に変身するという共通点があり、『太平広記』編纂者がこれらを類話と判断し、「人化水族」に収録したと考えられる。

- 7 「水族（小分類なし）」における、水族から人間への変身は巻四六四「横

公魚」(出『神異録』)の一例、人間から水族への変身は卷四六四「鰻魚」(出『西陽雜俎』)卷四六五「奔鯨」(出『西陽雜俎』)、卷四六六「夏鯨」(出『王年拾遺記』)の三例がある。

8 「北方荒」が具体的に何を指すのかが明らかでないため、原文のままとした。『山海経』に「大荒北経」があり、それと関係するとも考えられるが、未詳。

9 前掲加納書三六〇～三六一頁「熊」の項は、「能」とはクマを描いた図形だとする。

10 鰻魚については前掲加納書三三六頁「鰻」の項参照。

11 卷四六七「王瑤」の最後に、是夜、瑤又夢前人泣以相感云「免其五鼎之烹、獲返三江之浪。有以知長官之仁、比宗元之惠遠矣。」(後略)。その夜、瑤の夢に、前に夢で見たのと同じ人物が現れ、その人は泣きながら感動して言った、「おかげで煮られずに済み、川にもどることができました。これも長官さまの仁義あつてこそです。柳宗元の情けとは雲泥の差です。」(後略)とある。

12 ここに挙げた原文は『西京雜記』四部叢刊本に拠る。

13 山神について『文選』(四部叢刊本)卷一・班固「東都賦」に「山靈野を護り、属御に方神あり」とあり、李善の注に「山靈、山神なり」とある。

14 ここに挙げた原文は四部叢刊本『文心雕龍』(上海涵芬樓藏明刊本の影印)に拠るものである。なお、四庫全書本『文心雕龍』は「水怪」を「水師」につくり、周振甫『文心雕龍今訳』第一版(中華書局、一九八六年)三三〇頁も「水師」とする。

15 『太平広記』の成書年代については諸説あるが、ここでは李昉らによる「太平広記表」に「六年正月聖旨を奉じて印板を雕す」とあるのに従い、太

平興国六(九八)年とする。また、ここに挙げた『新五代史』は『新五代史』(中華書局、一九七四年)に拠る。同書巻頭の「出版説明」によると、『新五代史』については具体的な成書年代について不明であるが、歐陽脩は景祐三(一〇三六)年以前に着手し、皇祐五(一〇五三)年にはおおその原稿ができたがっていたと推測される。

16 蛟龍は、みずちと龍とする説(『中庸』など)と、水中にすむ龍の一種とする説(『莊子』秋水篇など)とがある。なお、みずちについては「蛟」[蚪]などの漢字をあてるが、前掲加納書四〇、六五頁は、「蛟」「蚪」のどちらも伝説上の動物で龍の一種とする。

(こ)やま・ひとみ 関西大学大学院博士後期課程